

“MY TOWN” うおっちんで

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.46

判明した蚕種業の建物 『須川蚕種』

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

岡崎 直司

地域の歴史を調べていると、ひょんなことから不明だった事柄が結びつくことがある。この洋風建築もその一つ。場所は八幡浜市昭和通り。以前から気になっていた寄せ棟屋根総二階建ての建物である。外観で洋風イメージを印象づける縦長の上げ下げ窓と、玄関部分のアーチ型庇が特徴。現在は八幡浜米穀という会社になっているこの建物のルーツは果たして？

実は、そのことが判明するきっかけとなったのが、須川の国道197号線沿いにあった土蔵（法眼院側）で、残念ながら昨年末に取り壊されてしまった。その蔵の入り口扉には、「須川蚕種」の文字がかるうじて読み取れ、気に留めていた。が、後の祭り。せめて記録でもと、

キャピタル（柱頭飾り）



正面玄関のアーチ飾り



カウンターと円柱



ナゾの金庫

所有者の河野央氏から聞き取りを行うことになった。（*蚕種とは、蚕蛾の卵のことで、養蚕業の元となり、養蚕経営の農家などに売られる。）

すると、河野家は大正時代頃に先代隆氏が「須川蚕種合資会社」を経営していたことが分かった。央氏によれば、開業に当たり入札があった、高額で落札したのだというエピソードが伝わっている。大正5年の「愛媛県内蚕種製造者番付」というリストによると、須川蚕種は西方の16位に位置し、同4年に開設されているとのこと。しかも、あの土蔵は氷庫で、蚕種を冷蔵貯蔵するための施設だった。こうした蚕種冷蔵法は、川之石の日進館（現愛媛蚕種）が明治37年に考案したもので、金山出石寺近くに天然氷の貯蔵庫を設けたことに始まり、当時の蚕種業界ではその品質確保からこぞって氷庫を設置するようになっていた。

この氷庫の他にも、隣接して長屋型式の蚕種倉庫、また総二階建ての蚕室や洋風の事務所棟、その裏手には別荘、道路向かいには住居や三階建ての洋館までが立ち並んでいたという。そうした印象からだけでも、養蚕業の全盛期であった活況の様子が偲ばれるというもの。茶室も設けてあった平屋の別荘などは、高知県

まで用材を探しに行き、総檜で建てたか。それら全ては時代の流れの中で消滅し、ただ一つだけ残っていたのがその氷庫だった。ただし、例外が一つ。昭和18年に国の命令で廃業となった際、それ以降に、建物群の中で事務所棟については八幡浜方面に移築されたとのこと。

これが、冒頭の建物に結びつくのだった。では、仔細にこの建築を観察してみよう。港への幹線道路である昭和通りに面して堂々と建っている。今となつてはいくつかの店舗に使用されているが、二階にある上げ下げ窓は9個が並んで、充分かつての面影は偲べる。洋風アーチに設えた玄関をくぐるとカウンタールがあり、ナルホド事務所型式で迎えられる。内部には前後に円柱が二本、上部にはキャピタル（柱頭飾り）も。意匠はこうした場合の定番であるアカンサス、西洋アザミの漆喰装飾だ。古めかしい金庫も置かれていたが、須川蚕種の時代のものかどうかは分からない。

二階へ上がらせてもらおう。今は何も使われていないらしく、ガランとした空間に大正の空気が漂う。春蚕、夏蚕、秋蚕、そうした季節毎の従業員のざわめきを具体的に想像するのは難しいが、一つだけ残っていたレトロな照明具の下で、かつてはきつと毎日が賑やかな日々だったことだろう。上げ下げ窓に近づくと、うまく意匠的に板硝子が使われていて

取り壊された土蔵の扉



洋風レトロな照明器具



二階案内



窓のガラス意匠



旧・須川蚕種全景



木造トラス・かぶら束

オシヤレ。玄関にあったガラス欄間もそうだが、この花柄模様のような粋な板硝子を建物調査の際時々目にするところがある。日本では、明治42年になってやっと板硝子の国産化が始まるが、建築意匠のモダニズムとして貴重な素材には違いない。

気になるので、屋根裏も確認することに。ひよつとして棟札でも見つかれば、と期待したが残念ながらどこにも無さそうだった。解体移築の際に除かれたかどうか。構造はトラス、斜材が集まる「かぶら束」も健在で、まだ立派なものだ。屋根も葺き替えられているので、当分は雨漏りの心配も無い。所有者が丁寧に維持してくれていることが有難い。木造建築は、雨仕舞いと白蟻対策さえ怠らなければ、耐用年数はかなり延びる。この洋風建築も、創業時からすると既に94歳の立派な後期高齢建築(?)だが、蚕種業を今に伝える数少ない歴史遺産として今後もかしくやくと居て欲しいものである。